

平成 28 年 3 月 25 日	病虫害発生予報 4 月号	茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会
---------------------	-------------------------------	------------------------

農作業事故が増加する季節です
～転落・転倒・巻き込まれに要注意！～

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：ハダニ類	1
半促成ピーマン：アザミウマ類	1
促成トマト・促成キュウリ：灰色かび病	2
4月のナシ黒星病の防除対策について	2
【その他の病虫害】	
イチゴ，促成ピーマン，半促成ピーマン，促成キュウリ，春ハクサイ，春レタス	3
【防除所レポート】	
オオムギ赤かび病の防除適期の予測	4
チャバネアオカメムシの越冬状況（平成28年2月調査）	6
II. 今月の気象予報 7	

本文に記載されている薬剤は平成28年3月16日現在のものです。
最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせください。
茨城県病虫害防除所 Tel : 029-227-2445
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/byobo/bojo/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、寄生葉率は平年よりやや高く(本年値 31.7%、過去6年平均値 21.9%)、発生地点率は平年より高い(本年値 100%、過去6年平均値 61%)。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を導入している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生花率は平年より高く(本年値 51.5%、平年値 18.0%)、被害果率は平年よりやや高い(本年値 0.3%、平年値 0.2%)。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤は、薬液が花や果実にもかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードもしくは系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を導入している場合は、影響が少ない薬剤を選択する。

促成トマト・促成キュウリ

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在, 促成トマトにおける発病株率(本年値 13.2%, 平年値 6.3%), 発病果率(本年値 0.37%, 平年値 0.20%)ともに平年よりやや高い。
- ② 3月下旬現在, 促成キュウリにおける発病株率は平年より高い(本年値 6.0%, 平年値 0.8%)。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿の場合に発生しやすいので, 送風, 換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 罹病部はできるだけ取り除き, ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤は, 薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また, 薬剤耐性菌の出現を防ぐため, FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。
- ④ 薬剤散布は, 晴れた日の午前中に行う。また, 曇雨天が続き薬液が乾きにくい場合は, くん煙剤を利用する。

4月のナシ黒星病の防除対策について

黒星病の第一次伝染源である落葉上の子のう胞子は, 例年4~5月に降雨がある度に飛散します。そのため, 以下の防除を徹底しましょう。なお, 昨年, 本病が多発した圃場では, 越冬菌の密度が高いと考えられ, 葉や果実での発病が多くなるおそれがあるため, 注意しましょう。

[防除対策]

- ① 黒星病菌は落葉上で子のう胞子を形成し, 第一次伝染源となる。圃場内に落葉が残っている場合はロータリーですき込む等, 適切に処分する。
- ② 芽基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため, 見つけ次第除去し, 土中深く埋める等適切に処分する。
- ③ りん片脱落直前及び落花期の DMI 剤散布は特に重要なので, 圃場をよく観察し, ナシの生育に合わせて確実に実施する。
- ④ 薬剤は, 10a 当たり 300 リットルを目安に, 散布圧や風圧を抑えて丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分に対しては, 手散布等により補正散布を行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや多い	3月中旬現在，平年並～やや多い発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並	3月中旬現在，平年並の発生である。
ピーマン 半促成	うどんこ病	発生量：平年並	3月中旬現在，平年並の発生である。
促成キュウリ	菌核病	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	べと病		
	うどんこ病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
春ハクサイ	白斑病	発生量：やや多い	3月中旬現在，平年よりやや多い発生である。
	アブラムシ類	発生量：多い	3月中旬現在，平年より多い発生である。
春レタス	腐敗病	発生量：やや少ない	3月中旬現在，平年よりやや少ない発生である。

オオムギ赤かび病の防除適期の予測

◎オオムギ赤かび病の防除適期

赤かび病の防除は、適期に行うことが重要です。防除適期は六条大麦では開花を確認した時（出穂期の3日後頃）、二条大麦では穂から葯が出ているのを確認した時（出穂期の12～14日後頃）になります（図）。予測されるオオムギの出穂期と赤かび病の防除適期は、表1に示したとおりです。

なお、出穂期は、幼穂長及び幼穂長調査日以降の日平均気温（実測値及び平年値）をもとに予測しています。このため、防除適期は、今後の気象条件等によって変動する可能性があるため、麦の生育状況をよく観察してください。

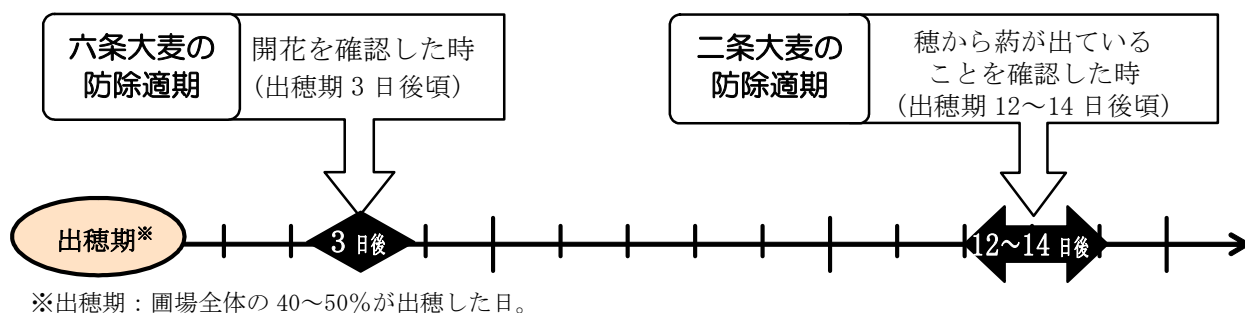


図 オオムギ赤かび病の防除適期

表1 オオムギの予測出穂期と赤かび病の予測防除適期（平成28年3月22日現在）

麦種	品種	地域	調査地点	播種日	予測出穂期 ¹⁾	予測防除適期 ²⁾
六条大麦	カシマゴール	県央	水戸市小林	11/13	4/12	4/15
			那珂市飯田	11/ 8	4/16	4/19
		県南	河内町源清田	12/ 7	4/17	4/20
		県西	筑西市小栗	11/27	4/16	4/19
	カシマムギ	県西	桜川市真壁町亀熊	12/ 4	4/21	4/24
			八千代町高崎	12/ 5	4/16	4/19
二条大麦	ミカモ ゴールデン	県南	稲敷市佐原組新田	12/ 7	4/16	4/28～4/30
		県西	筑西市女方	11/30	4/24～4/26	5/ 6～5/10
			筑西市小栗	11/16	4/11～4/13	4/23～4/27

1) 農業研究所ホームページに掲載されている「麦類主要品種の主稈長による茎立ち期、幼穂長による出穂期予測法」の計算式を用いて予測した。なお、予測の際、平均気温は、幼穂長調査日（3/15～17、3/22）から各調査地点付近のアメダス観測所の実測値および平年値を利用した。

2) 予測防除適期は、六条大麦は出穂期の3日後、二条大麦は出穂期の12～14日後とした。

◎オオムギ赤かび病の効果的な防除

赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適条件は、「日最低気温 10℃以上，日最高気温 15℃以上の条件を満たし，湿度 80%以上の日か降雨日とその翌日」です。飛散好適条件が続く場合は，1 回目の薬剤散布 7～10 日後に 2 回目の散布を行います。薬剤を選定する際は，使用回数や収穫前日数に十分注意してください（表 2）。また，2 回以上散布する際は，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いるようにしましょう。

表 2 オオムギ赤かび病に登録のある主な薬剤（平成 28 年 3 月 16 日現在）

薬剤名	FRAC コード ¹⁾	系統名 ²⁾	希釈 倍数	使用時期	本剤の 使用回数	無人ヘリでの 登録の有無 ³⁾
トップジンM 水和剤	1	ベンゾイミダ ゾール系	1,000～ 1,500 倍	収穫 30 日前 まで	3 回以内 (但し，出穂 期以降は 1 回以内)	無 ⁴⁾
ストロビー フロアブル	11	ストロ ビルリン系	2,000～ 3,000 倍	収穫 14 日前 まで	3 回以内	無
チルト乳剤 25			1,000～ 2,000 倍	収穫 21 日前 まで	1 回	有
シルバキュア フロアブル	3	ステロール 生合成阻害剤	2,000 倍	収穫 14 日前 まで	2 回以内	有
ワークアップ ⁵⁾ フロアブル			2,000 倍	収穫 7 日前 まで	3 回以内	有

- 1) 殺菌剤耐性菌対策委員会(FRAC)により，殺菌剤の有効成分の作用機構を分類し，コード化したもの。系統名より細かく分類されている。
- 2) 薬剤の化学構造や作用の特徴によって分類したもの。
- 3) 無人ヘリ散布を行う場合は，希釈倍数が表中の内容と異なるので十分注意する。
- 4) トップジンM水和剤と有効成分が同じであるトップジンMゾルは無人ヘリの登録がある。
- 5) ブームスプレーヤーによる専用ノズルを用いた少量散布も可能である。使用時には希釈倍数等の登録内容を確認すること。

[お知らせ]

コムギの出穂期及び赤かび病の防除適期は，4 月上旬発表予定の病害虫速報で情報提供します。防除所のホームページをご覧ください。

チャバネアオカメムシの越冬状況（平成 28 年 2 月調査）

本年 2 月上旬に山林の表層土を含んだ落葉を 1 地点当たり 30 リットル採取し、チャバネアオカメムシ成虫の越冬数を調査しました。落葉の採取は常陸太田市、笠間市、水戸市、小美玉市、銚田市、行方市、石岡市、つくば市、桜川市の合計 42 地点で行いました。

その結果、越冬数は平年よりやや高く（本年値 4.8 頭、平年値 3.2 頭）、越冬地点率は平年並（本年値 62%、平年値 43%）となりました（表、図）。

表 県内チャバネアオカメムシの越冬数調査結果

調査項目	平成 28 年		平年
	調査値	順位 ^{※2}	調査値
越冬数(頭) ^{※1}	4.8	4 位	3.2
越冬地点率(%)	62	5 位	43

※1 成虫数/落葉 30 リットル当たり

※2 本年を含む過去 11 年中の順位

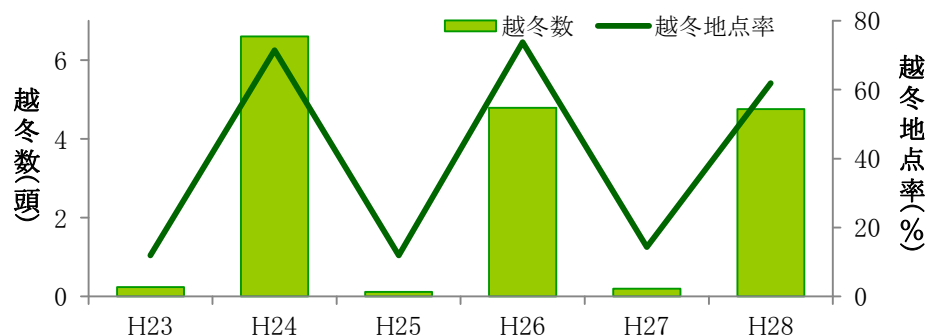


図 チャバネアオカメムシの越冬数および越冬地点率の年次変動

チャバネアオカメムシは、越冬数が多くなると、その年の 7 月までの果樹園への飛来が多くなる可能性があります。病害虫防除所では、果樹カメムシ類について予察灯調査（4～10 月）、サクラにおける発生量調査（5～6 月）を行うので、今後発表する情報に注意してください。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 3月26日から4月25日)

気象庁(3月24日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	10	30	60
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

<1週目の予報> 3月26日(土曜日)から4月1日(金曜日)

気温 高い確率50%

<2週目の予報> 4月2日(土曜日)から4月8日(金曜日)

気温 高い確率60%

<3週目から4週目の予報> 4月9日(土曜日)から4月22日(金曜日)

気温 平年並または高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類* (FRACコード, IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成27年4月28日発表)の防除所レポート参照